

### 今後の当山行事予定

開創一千二百年祝禱法要(5月25日～5月28日)

5月25日 開創一千二百年特別大護摩供  
開創一千二百年記念事業落成式

5月28日 大般若経転読付大護摩供  
午前11時30分  
開創一千二百年記念柴燈大護摩供  
午前12時頃

\*5月24日・5月25日は、日中のお護摩祈禱のお勤めはございません  
\*5月25日～5月28日は、交通安全祈願のお勤めはございません

観世音夏まつり(7月11日)

●施餓鬼廻向法要

午後 \*改めてご案内いたします

地蔵盆(8月24日)

●地蔵尊前にてお勤め  
午後4時よりお勤め予定

行事予定は3月時点での予定です。今後、新型コロナウイルスの感染拡大等により変更する場合があります。詳しくは瀧谷山公式ホームページなどで随時ご案内いたしますので、ご確認くださいませ。

#### 交通安全祈願

午前9時より午後4時まで  
毎時0分/30分の30分毎  
毎月28日および5月25日～5月28日は交通安全祈願のお勤めはございません

#### 日々のお護摩祈禱

(平日) 午前7時 10時 11時30分  
(土・日・祝) 午前7時 10時 11時30分 午後1時30分 3時  
(毎月28日) 午前6時 10時 11時30分 午後1時30分 3時  
5月25日および下記仏具磨きの日は、午前7時のお勤めだけです。

#### 仏具磨きの日のお知らせ

4月26日 5月24日 6月25日 7月26日 7月30日 8月25日

この日は仏具磨きの日ですので、お護摩祈禱は午前7時のお勤めだけです。

#### 編集後記

コロナ禍のお正月もひと段落し、瀧谷不動尊も少しずつ平常の様子を取り戻して来りました。この春号が発行する頃には、汗ばむ陽気がそこまで来ていることでしょうか。

今年は、開創一千二百年の年となります。コロナ禍を受け、予定していた様々な行事を中止せざるを得なかったことは残念でなりません。新たな時代にお不動様のご威徳を伝えていくべく、日々精進して参ります。

瀧谷不動尊の公式ホームページが新しくなり、スマートフォンでも閲覧しやすくなりました。左上のQRコードより、ご覧いただけます。

編集人



令和3年4月発行

通巻 169号

発行所

瀧谷不動明王寺

〒584-0058

富田林市彼方1762

電話 0721-34-0028

振替 00930-5-17704

● 発行人 荒谷純光

● 編集人 荒谷純栄

- 開創一千二百年祝禱法要告示 2～3頁
- 開創一千二百年記念 特別奉納写経のお知らせ 4頁
- ご朱印のこと 6～8頁
- 弘法大師(第三 菩提篇) 8頁
- お寺のこぼれ話 8頁
- うどんみやげ寿司「紅縮」オープンのお知らせ 8頁
- 開創一千二百年記念事業寄進者御芳名 9頁
- 鐘樓堂修復事業寄進者御芳名 10頁
- 奉納者御芳名/迎春行事報告とお詫言 11頁
- 今後の当山行事予定 12頁

### 慶事に寄せて

新しい年がやってきて、

きのうが

きよねんになって、

きよりの ぼくは

きのうの ぼくで なくなつた。

お宮の大杉に

新しい しめ縄 張つてある。

大杉は、新しい年になって、

一年古くなつた。

新しくなるって 古くなることか。

古くなつて 新しくなる。

ぼくも、

古くなつて 新しくなつた。

(『定本高橋忠治全詩集』より引用)

これは「きよりの ぼく」という題名の詩である。一見してこどもが書いた詩と思ひ込みそうであるが、

作者は老境に達した詩人。元日を

迎えた心境を幼子のような無垢の

感性で表現している。既に数多くの

新年を経験してきた作者は、年越

しの中に秘められた扉をふと開け

た。そこには過去から未来を貫く

無常の真理が垣間見えた。新旧とい

う区別や線引きはどうやら不確か

で儂いものでもあること、あるいは日

常性の中にこそ見落としてはならぬ

「ものの観方」があることを、すっか

り年老いた作者は心の背筋を直し

て謳っている。

作者のような澄明な感性は、本来

誰もが備えている。こどもの時に経験

した喜びや驚きは、その証左である。

だが人は成長と共にその感性をいつの間にかどこかに置き忘れたり、時には封印してしまうことさえある。

仏教の視点も何かこれに似てい

る。仏典には私たち衆生が本来「す

ばらしい徳性」を有していること

を認め、これを自性清浄心(じじやうじやうじん)浄菩提

心(じゆんごういん)などとして表現する。

瀧谷山で読誦する和讃に「固より

具足の不動力」という一節が登場す

るのも同じ意である。

だがこのすばらしい宝のような特

性は、時間が経てば自然発芽する

わけでもなく、油断をすればどんど

ん自分からかけ離れたようにもな

る。対して自己に内在するこの宝

「ほとけ」を大切にしてい

悲深き生活を重ねれば、その宝は

重みも輝きも増し、決して減ずるこ

とはない。これを正に体得されたのがお釈迦様であり、弘法大師であり、有名無名の仏教徒たちである。

自己に内在する宝を大切に育む

ことを「福田を耕す」ともいう。お

釈迦様の故事に因むこの言葉はやわ

らかく、そして凛としている。春の訪

れと共に各地では田起しが始まる。

良質の米をたっぷり実らせるために

は深く土を耕さねばならない。それ

と同様に私たちもまた、より善き人

格、より善き社会を醸成するため

は福田を耕す人であり続けたい。

数知れぬ善男善女がこの瀧谷の不

動尊を尊崇し、福田を耕し、大利益

を蒙ること千二百年の時が流れた。

「古くなつて 新しくなつた」瀧谷山

の慶事を祝うと共に、「本尊お不動

様に深く頭を垂れるばかりである。

# 奉修 開創一千二百年祝祷法要

令和三年五月二十五日 開創一千二百年記念特別大護摩供

開創一千二百年記念事業落成式

2

令和三年五月二十八日 大般若経転読付大護摩供

開創一千二百年記念柴燈大護摩供

当山は平安時代弘仁十二年(西暦八百二十一年)弘法大師の開山と伝えられ、令和三年は開創一千二百年に正当いたしました。この勝縁に際し、右記の通り開創一千二百年祝祷法要を奉修し、併せて開創一千二百年記念事業として進めております。寺務棟・客殿棟の落成式を執行いたします。

当事業は、災害対策に限界のあった旧来の木造建築を更新するもので、延べ約九百坪の新築工事であり、総事業費十二億円、工期は三年あまりの大事業となりました。当事業には、かねてより広くご奉讃をお願いいたしましたところ、まことに多くの方々からご信援を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

さて当山ではこれまで、当事業にご奉讃いただいた皆様を、祝祷法要にご招待するべく鋭意準備を進めてまいりました。然

し乍ら、昨年より猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の影響は如何ともし難く、熟慮の末、現況では、とても多くの皆様をご招待し、安心してご参拝いただくことは難しいとの結論に至りました。

そのため、まことに勝手ながら祝祷法要へのご信徒皆様のご招待は取りやめとさせていただきます。法要にまつわる様々な行事も延期し、法要規模を縮小して執行行うことといたしました。つきましては法要後、瀧谷山報特別号を発行し、祝祷法要の模様を仔細ご報告申し上げます。ご奉讃いただいた皆様には規定により用意の記念品をお送りいたします。

楽しみにお待ちいただいた皆様にはまことに心苦しい限りでございますが、現下の情勢に鑑み致し方ないと判断いたしましたこと、何卒ご寛恕の程お願い申し上げますとともに、ご信徒皆様におかれまして

は、この勝縁に際しより一層のご信心を賜り、お不動様のさらなるご利益を授かっていただきますよう、伏してお願ひ申し上げます。次第であります。

瀧谷不動尊では、右記日程で開創一千二百年祝祷法要を奉修いたします。

○祝祷法要準備のため、5月24日・5月25日は、日中のお護摩祈禱はございません。また、日中は建物内へはご入場いただけません。

○5月25日より5月28日までは、交通安全祈願のお勤めはございません。

○5月28日の柴燈大護摩供は、ご自由にお参りいただけます。

○法要後、瀧谷山報特別号を発行するとともに、記念事業にご奉讃の方には記念品をお送りいたします。

3

### 開創一千二百年記念 特別奉納写経のお知らせ

瀧谷不動尊では『法華経』を納経しつつつ遍歴した開創一千二百年記念 特別奉納写経』と題した写経の企画を行なっております。この企画は、お不動様のお徳を説いた『不動経』を、令和三年の開創一千二百年にちなみ、一二〇〇巻奉納することを目指して企画されました。

これにちなみ瀧谷不動尊では、この企画だけの特別御朱印を製作。写経を奉納いただいた証としてお授けいたします。特別ご朱印は、お不動様の智慧の光に照らされた金色の世界をイメージし、金色の特殊な台紙を使用、「開創一千二百年」の押印をして授与いたします。

一二〇〇巻の写経に合わせ、特別ご朱印は一二〇〇枚限定となります。これまでにたくさんの方が写経を奉納され、限定一二〇〇セットの残りも少なくなってきました。奉納ご希望の方は、お早め内申し上げます。



山上の多宝塔

「法華経」を納経しつつつ遍歴した「六十六部衆」と呼ばれる修行者たちがあるとされます。修行者が納経の証として受け取った証文がご朱印の起源とされ、四国八十八箇所霊場などでは、写経を奉納しつつ遍路する修行が今なお伝えられています。

写経の起源は一世紀ごろの古代インドとされ、当時の人々が仏の遺骨である仏舎利のかわりとして、経典を仏塔(チャイトヤ)に納め、供養した姿が『法華経』『般若経』などの経典に説かれています。日本においても、亡き人の供養のためや、疫病退散を祈願して盛んに写経が行われ、各地に納められたことが記録に残っています。瀧谷不動尊ではこの伝統を踏まえ、このたび奉納いただいた写経は山上の多宝塔に納め、永年にわたり供養いたします。



新しくなった写経用紙

### ●「阿遮」の朱印のこと

「阿遮一呪すれば 業寿の風定まり 多隸三喝すれば 無明の波洶れぬ」

弘法大師は主著『秘蔵宝鑰』において、お不動様のご利益をこのように描写しました。

「阿遮」とはお不動様のごこと、「一呪」とは、お不動様特有の左目を閉じ、右の目で呪むしぐさです。「業寿の風」とは、なかなか難しい表現ですが、私たちの欲求やむさぼり、よこしまな心の積み重ねたものが業です。その悪い業の報いによって、私たちのいのち(寿)が、生まれ変わりに死に変わりを繰り返して苦しんでいるさま、この様子を絶えず吹く風に喩えているのです。

お不動様は救い難い者をこそ救うため、勇ましい忿怒の表情をしておられます。こうした欲やむさぼりなどの煩惱を持つ

我々でも、お不動様の鋭い視線で呪むと、それらがびたりと鎮まるのだと、弘法大師はそのようにお不動様の功德を表現しています。

また「多隸」とは、三つの顔を持つ降三世明王のことです。お不動様も降三世明王も、険しいお顔の明王さまであり、明王さまのひと呪みや喝で、私たちのよこしまな煩惱や根源的な無知はたちまち鎮まる、と述べられています。

さて、当山のご朱印の中央墨書は「阿遮羅殿」と書いています。これは「お不動様のいらっしゃる宮殿」という意味です。

仏教発祥の地であるインドの古典語・サンスクリット語で「お不動様のことを「アチャラナータ」といいます。これは「動かざる守護者」という意味です。お不動様のゆるぎないお姿、その徳

を表す名前です。この「アチャラナータ」を、仏教がインドから中国へ伝播した際、その響きをできる限り忠実に表現するために「阿遮羅囊他」と漢字を当てたのです。それゆえに、「阿遮」は「阿遮羅」とはお不動様を指すのです。

ところでご朱印は、「朱印」というだけあって、中央に印が押してあります。この印はご本尊さまや三宝(仏そのもの・仏の教えである法・仏の法を伝える僧の三つを指します)を表すもので、いわばこちらが本体とも言えます。

中央墨書部分は、お祀りしているご本尊さまの名号をそのまま書きする場合や、当山のよきする例も多数あります(摩尼殿・大悲殿など)。墨書部分には寺院ごとの工夫やこだわりも見られ、何て書いてあるの？

どういう意味かと、こうした点にも注目してみると、また違ったご朱印の楽しみ方ができるかもしれません。

とはいえ、ご朱印は、お不動様や仏さまとご縁を結んでいただいたおしるしにいただくものです。受けられた方は、どうぞ大切になさってください。



特別ご朱印

弘法大師

〈第三 菩提篇〉

当山の開基と伝えられる弘法大師空海さま。そのご生涯を発心・修行・菩提・涅槃の四篇に分けて簡単に紹介するコーナーです。第三回は菩提篇です。菩提とは「さとり」の智慧であり、さとの智慧の完成は仏道修行の到達点といえます。けれども、仏教ではさとりを得たその地点を最終的なゴールとは捉えません。さとりた人はこの世で苦しむ人々を教え導き、救うことをその使命とします。むしろ、この智慧の完成によつて、人々を救う理想的なはたらきが可能になるのです。

前回は、弘法大師が唐での修行を終え、帰国するまでを見てきました。唐での修行で、師から密教の奥義を授かった弘法大師。今回は

帰国してから、弘法大師が人々にいかに教え導き、唐で得た知識や技術を世に還元していったか、その

足跡を辿っていきます。

高雄山寺へ入る

二年余りの修行を終え、唐から帰国した弘法大師。しかし実は、当初の予定では二十年という長期の留学をさだめられていました。これをたつた二年で切り上げて帰国してしまつたこともあり、しばし九州に留め置かれましたが、それまで日本に伝わっていなかった経典や法具、曼荼羅等を持ち帰つた業績を評価され、京都の高雄山寺（現在の神護寺）に入ります。

当時は平城天皇が病に倒れ、それに伴う譲位や対立などで政情が不安定だつたこともあり、弘仁元年（西暦八一〇年）、この高雄山寺で弘法大師は国家の平穩を願ひ、祈祷をつとめます。

両部の灌頂

前回登場した運命の師・恵果和尚。この恵果和尚によつて弘法大師は様々な密教の修法を授か

りました。中でも重要なものが灌頂という儀式です。入門の折、あるいは修行を終えた証として受けるとても大切な儀式です。自らが唐に渡り、密教の教えを求めた時のように、帰国後は自身が師となり、密教を学ばんとする者たち

にこの灌頂を授けていくことになりました。

弘仁三年（西暦八二二年）、高雄山寺において、弘法大師は初めて灌頂を授けます。

この時に授けたのが金剛界・胎藏の灌頂です。密教には金剛界・胎藏という二つの世界観が存在します。これら二つの世界観をあらわしたのが金剛界曼荼羅・胎藏曼荼羅であり、これら二つの曼荼羅を「両部の曼荼羅」と言います。これらの曼荼羅に、たくさんの仏さまが整然と並んでいる姿をご覧になつた方も多いかもれません。

金剛界・胎藏の灌頂とは、灌頂を受ける弟子が、文字通りこの曼荼羅に「入る」儀式です。それは、

弟子が自らの内にある仏の素質に

めざめ、仏の列に加わることを意味します。その意味で、この両部の灌頂は、真言宗が伝える最も深遠で崇高な儀式のひとつとされます。

弘法大師はこの時、十一月と十二月にそれぞれ灌頂を行じ、これに、密教を志す多くの受者が集いました。この時灌頂を受けた人々の名は『灌頂曆名』という直筆の記録として残っており、国宝に指定されています。その中には弘法大師と同じ時期に唐に渡り、日本天台宗を開いた伝教大師最澄さまの名も見られます。

密教を弘め 人々を護る

病気の平城天皇に代わつて即位したのが嵯峨天皇です。この嵯峨天皇が、弘法大師のその後の生涯における最大の支援者となりました。嵯峨天皇は、弘法大師・橘逸勢とともに三筆に数えられる能書家でもあり、同じ教養をもつ文人として、また「日本で密教を

弘めよ」という師からの遺言に込めようとする大師の後援者として、深い関係を結んでいきました。

さて弘仁七年（西暦八一六年）、弘法大師は嵯峨天皇のもとで都のさまざまな仕事をこなすかわら、密教を志す者が都市の喧騒を離れ、修行を深められるよう、静かな場所に道場を建立したいと思ひ立ちます。そのために選ばれた地が高野山でした。弘法大師は、高野山に金剛峯寺を建てるため、その土地の下賜を嵯峨天皇に申し入れ、天皇は快くそれを許します。こうして現在に至るまで聖地として仰がれる高野山の地が誕生したのです。

この弘仁年間（西暦八一〇〜八二四年）、弘法大師は高野山の創建に伴い、都と高野山を結ぶ街道（近世までの東高野街道）を度々通つていたものと考えられます。この街道周辺の河内の諸寺には、弘法大師がこの頃に、周辺の人々のため、雨請いの法を修すなど、さ

まざまな活動を行つたという伝説が数多く伝えられています。

当山の創建もまさにこの時、寺伝によれば弘仁十二年（西暦八二

一年）のこと。現在の境内地より南に約1キロ、古来よりこの地方の霊山とされてきた嶽山に、弘法大師が自ら刻んだ不動明王像及び二童子像を安置したのがはじまりとされます。この時刻まれたお不動様はそれ以来二二〇〇年間、この地の人々を見守り、心のよりどころとされてきました。お不動様に数々の不思議なご利益を頂かれた話が多く伝わるのも、人々のために努力する弘法大師の強い思いに、お不動様が応えられたからこそではないでしょうか。

弘仁十三年（西暦八二二年）二月、嵯峨天皇は、弘法大師のこれまでの活動を評価し、東大寺に国家のための灌頂道場を建立するよう命を下し、いつそう広く密教を弘めていくように命じます。さらに弘法大師は、翌十四年（西暦



弘法大師の教育観

天長五年（西暦八二八年）、弘法大師は庶民教育のための私立

学校を創立し、これを綜芸種智院と名づけます。仏教と、儒教・道教の教えや、その他の諸学を広く学ぶことを期してつくられました。

弘法大師自身、青年時代に都の大学で学びましたが、これは早い話が貴族の子弟のための学校でした。貧しい家の子に向けては開かれていません。そうした現実と、自分が理想とする学問や教育というものに隔たりを感じたことなどは、弘法大師の出家の遠因ともいえるでしょう。また、唐へ留学した際、県ごと・地区ごとに学校や塾が多く充実した教育環境を見たことがこうして庶民のための学校を作る動機となつた、と弘法大師は述べています。

大師は言います、身分の貴賤や貧富の差ではなく、その人の状況やあり方、求めるところに応じてみな教え導くべきであり、大きな建物がたくさんの建材で支えられているように、大海が支流から流れ込んだたくさんの水によつてそ

の深さ広さを成しているように、多くの子どもたちや学問を志す人たちが教育を受けることができればたとえ百代先までも教えを受け継いでいくことができるのだ、と。

このような弘法大師の活動も、密教の智慧によって、あるいは、自ら伝えた技術・知識によって、この国の人々を護り、教え導くという思いがあつてのことに違いありません。

時に弘法大師、五十五歳。弘法大師のご生涯も晩年に差し掛かり、円熟期を迎え、ここから更に大きな事業を成し遂げていきます。続きはまた次回。



お寺のごはん 4 蕨ごはんとおつゆ

大阪市内をはじめとして近畿一円に講社(参拝を目的とする団体)があり、大正、昭和の最盛期には百にも上る数であったと古く講社台帳に記録されています。春には連日、幾組もの講が二百人、三百人などの団体を組んで参拝されたそうです。

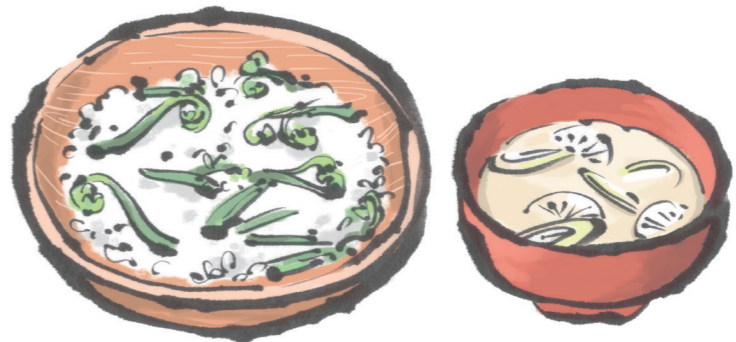
当時は交通手段も限られていたので、早朝に出かけても到着までには相当時間がかかりました。そんなわけでお護摩の前に「おちつき」といってお茶がわりに木皿で蕨ごはんや筍ごはんを召し上がっていただいたそうです。太平洋戦争で一時中断しましたが戦後復活して、昭和五十年代の終わりごろまでは講登りがかなり盛んでした。バスを仕立てての団参もありました。このころには坊入りのお膳(お接待の

お膳)を用意することはできなくなつて、講の方で仕出しやお弁当を用意されるようになりました。それでも以前の名残なのか、「蕨ごはんをお願いします」といわれる講社が多く、その時には「白みそのおつゆ」も必ず一緒にご所望になりました。

「白みそのおつゆ」は、関西人にとつては、特別なおつゆです。今よりもっと山深かった当時、お寺での蕨ごはんは町からの団参の方々にとつてはひとしお心に残る味わいであつたことでしょう。そして「白みそのおつゆ」もまた、素朴な「蕨ごはん」をご馳走に仕立てることのできる一品であつたことに違いありません。

その頃の使い古したお椀や木皿など今なお残っていて、いまだ現役のものもあります。蕨のあ

くぬきも当時は灰を使つていました。今では灰も手に入りがたいものになってしまいました。感慨深い「蕨ごはんとおつゆ」です。



うどん みやげ寿司「紅焔」オープンのお知らせ

昨年12月より、明王殿二階にうどん・みやげ寿司のお店「紅焔」が新店されています。

紅焔は地元の集落で五十年以上前から営業されている寿司店で、紅焔の名付けは瀧谷不動尊の先代住職・実善僧正によるもの。この場所では長年、旧「から亭」が営業されていましたが、ご引退に伴い新たに、うどん・みやげ寿司のお店「紅焔」としてオープンされました。

お品書きはうどん・そばを中心に、きつねうどん(六五〇円)や天ぷらうどん(八五〇円)など。セットメニューで握り寿司セット(四〇〇円)やミニ鉄火丼セット(五〇〇円)などがいただけます。握り寿司セットは、サーモン・まぐろ・えび・うなぎの四貫でお腹いっぱい。奇を衒わない、昔ながらの優



きつねうどん 握り寿司セット

しい味がいただけます。

紅焔さんと言えば、うなぎ。握り寿司セットにもうなぎが入りますが、うなぎの入った巻き寿司が紅焔さんの名物です。こちらの「紅焔」でも『福宝巻』という名前で提供されていますので、是非ご賞味あれ。お参りの前に注文しておく、帰るまでにご用意いただけるそうです。

車椅子の方でもエレベーターがあるので大丈夫。お参りの際はどうぞお立ち寄りください。



○ラストオーダー  
月～土……………午後2時  
日・祝・28日……………午後4時  
※お問い合わせは、直接「紅焔」さんへお願いします

開創二百年記念事業  
寄進者御芳名(敬称略順不同)

- 富田林市
- 羽曳野市
- 松原市
- 河内長野市
- 貝塚市
- 松原市
- 和泉市
- 兵庫県
- 愛知県
- 岸和田市
- 河内長野市
- 守口市
- 富田林市
- 松原市
- 三重県
- 富田林市
- 兵庫県
- 兵庫県
- 兵庫県
- 河内長野市
- 南河内郡
- 東京都
- 堺市
- 大阪府
- 柏原市
- 富田林市
- 滋賀県
- 堺市
- 大坂市
- 河内長野市
- 和泉市

